子ども夢基金助成「美保野おはなしの会」読書推進活動について

The Activities for Promotion of Reading and Story Telling
― The Record of Mihono Ohanashinokai Funded by The Children's Dream Fund ―

外崎　充子　　茂木　典子　　佐藤　愛子
三浦　文恵　　三村　弥生

要約　本研究は平成22年度、短大教員5名で「美保野おはなしの会」を結成し、独立行政法人国立青少年教育振興機構より「子ども夢基金」の助成を受け、青森県内で読書推進活動を行った実践の記録である。講師に絵本作家や児童文学者、読み聞かせ実践者等を招き、県内5箇所（青森市・弘前市・むつ市・十和田市・八戸市）で10回の講演会を開催した。活動を通して子どもの読書、とりわけ絵本に関わる多くの方々との出会いがあった。実践の全体的な成果は今後に委ねるとして、ここに1年間の活動を振り返り、課題と成果を検証する。

Ⅰ．は　じ　め　に

この実践記録は、平成22年度本学の教員5人が青森県内一円に読書推進活動を展開した際の活動の記録である。1年間の活動をふりかえって記録に留め、活動実績を考察・検証するものである。

平成21年9月、独立行政法人国立青少年教育振興機構から「平成22年度子どもゆめ基金－助成金募集案内－（子どもの読書活動助成用）」の募集案内[1]を受けて10月に上記5人が「美保野おはなしの会」を結成し計画調書を作成した。

計　画　調　書

○　趣　旨

本会が、読書推進の講演会を開催し、指導実績やノウハウを広く県民に提供して、子どもの読書推進活動に主体的に関わる指導者を養成する。この活動を通して地域全体に読書活動が継続的に広がっていくことをねらいとする。

○　役割分担

会　長　外崎充子

副会長　茂木典子　　総　務　三浦文恵

会　計　佐藤愛子　　庶　務　三村弥生

○　活動プログラム

活動項目	活　動　概　要
開　催 予 定 日	毎月第一水曜日に読書推進講座を開催する。（計 10 回）
時 間 帯	13：30～15：30
会　　場	県内各地区の公民館等
参　加 対 象 者	青森県内の読み聞かせ実践者・指導者
募集方法	県内の教育関係・公共施設に 募集案内を配布する
講　　師	絵本作家・児童文学者、読み聞かせ指導者ならびに八戸短期大学教員
助成対象 経費項目	講師への謝金・旅費・募集案内印刷費・発送費　会場貸借料等

上記を含む詳細な計画調書を平成 21 年 12 月に国立青少年教育振興機構に提出し、22 年 4 月に採択内定通知を得た。

読み聞かせ講習会

主催：美保野おはなしの会（八戸短期大学内）
（０１７８）２５－４４１１

美保野おはなしの会は、本が大好きな方・読み聞かせに興味がある方を対象にした読み聞かせ講習会です。国民読書年の今年、県内各地で全回無料で開催致します。どなたでもお気軽にご参加下さい。

日程
５月２１日（金）１３時半　八戸市公民館講義室　講師：佐藤愛子さん
６月２１日（月）１３時半　八戸市立図書館２階　講師：平間恵美さん
７月２７日（火）１０時　八戸市公民館ホール　講師：あまんきみこさん
８月６日（金）　１３時半　むつ市下北文化会館　講師：平間恵美さん
９月１０日（金）１３時半　弘前文化センター　講師：高橋幸子さん
１０月８日（金）１３時半　青森県立図書館　講師：とよたかずひこさん
１１月８日（月）１３時半　八戸市公民館講義室　講師：佐々木正さん
１２月６日（月）１３時半　八戸市公民館講義室　講師：とよたかずひこさん
１月１８日（火）１３時半　十和田市民文化センター講師：秋田敏博さん
２月１６日（水）１３時半　八戸市公民館講義室　講師：八戸短期大学教員

―美保野おはなしの会告知チラシ―

Ⅱ．美保野おはなしの会メンバー

外崎　充子

八戸短期大学幼児保育学科で児童文学Ⅰ・児童文学Ⅱを担当。Ⅰ・Ⅱを通して絵本の「読み聞かせ」や「制作」を行っている。平成 22 年度は 1 年生が「名前絵本」、2 年生が「創作絵本」を制作し、それぞれ発表会・合評会を実施した。

前任は県立高等学校教員。専門は平安女流文学。昭和 50 年代から教育相談に携わり、学校カウンセラーとして新聞や雑誌に執筆。著書に「光源氏の生涯」「教育相談の実際」（共著）等がある。

茂木　典子

八戸短期大学幼児保育学科で「言葉」「国語表現」等を担当。八戸短期大学付属幼稚園園長を兼務。

前任は県立高等学校教員。話すこと、朗読等を重視した授業を行ってきた。大学の朗読サークルで内藤濯（「星の王子さま」訳者）の指導を受け、アナウンススクールでアナウンスの基礎を学んだ。高文連放送部で生徒と後進を指導、放送コンテスト全国大会上位入賞者も育成。

現在、コミュニティ FM ボランティアスタッフとして番組制作活動 12 年目。

佐藤　愛子

八戸短期大学ライフデザイン学科で「国語表現」幼児保育学科で「ピアノレッスン」を

担当。日本児童文学者協会会員。児童書単行本、雑誌に執筆。主な作品に 第43回青少年読書感想文コンクール課題図書「あきかんカンカラカンコン」、第34回日本児童文学者協会新人賞「わすれてもいいよ」などがある。子ども対象図書館講座で「絵本づくり」や「楽しく書こう読書感想文」など、子育てサポーター養成講座で絵本・児童書の紹介などを行っている。

三浦　文恵

八戸短期大学ライフデザイン学科で「コミュニケーション論」「基礎英語」「観光英語」を担当。

昭和63年～65年八戸テレビ放送、平成3年青森朝日放送でアナウンサーとしてニュース担当。平成7年～フリーになりテレビ・ラジオ番組出演、司会、朗読指導を行なう。平成14年八戸市教育支援ボランティア登録をし、小中学校で読み聞かせ活動を開始。同年よりNHK文化センター朗読講座講師。

同年9月八戸市教育支援ボランティア有志と八戸市読み聞かせボランティア団体「青い鳥」設立、平成20年より代表。各教育機関や公的施設で出前読み聞かせ・朗読指導を行っている。

三村　弥生

八戸短期大学幼児保育学科で「乳児保育」「指導計画論」を担当。

元保育士。長い間、乳児の保育を担当した。

保育に数多くの絵本や紙芝居・パネルシアターなどを取り入れた。保育技術向上のため、読み聞かせの研修などに参加した。

Ⅲ．講演会開催に当って

(1) 講師依頼

会員の知己などを通して情報を集め、中央の講師を二方（3回）、地域の講師を四方選んだ。日程調整や移動手段等を考慮して7月にあまんきみこ先生、10月と12月にとよたかずひこ先生をお招きすることになった。地域の講師にも内諾をいただいて6人の方々に依頼状を発送した。

(2) 会場の確保

10回のうち、5回を八戸市内とし、他を青森、弘前、むつ、十和田の各市で開催する。いずれも公共の施設を利用することとし、内諾を得た後、会場貸借の申し込みした。

(3) 時間帯

参加者の参加しやすい時間帯を推定し、平日の午後13:30～15:30とした。

(4) 参加対象者

青森県内の読み聞かせ実践者を対象とし、公募によってお知らせを行う。お知らせのチラシ・ポスターは各地区の公民館や図書館、病院や食堂などに配布し、掲示を依頼する。

(5)「美保野おはなしの会」会員の打合せ

各講演会の前に1～3回の打合せを行う。打ち合わせでは、参加者募集のチラシ・ポスターの作成、会場看板、各種依頼文、アンケートの文案など開催までの業務を行う。毎回会員5人が揃うのは難しいと予想された。

(6) 助成金の交付

子ども夢基金から100万の助成を受けることが決定していたが交付の時期が遅く、会計

は会員の立替によって進行することになる。

(7) 助成交付の条件

募集案内には子ども夢基金助成交付の条件が29項目にわたって示されている[2)]。

主な項目としては

・交付要綱及び子ども夢基金助成金子どもの読書活動助成要項を遵守すること

・活動の実施にあたっては、必要最小限の費用をもって最大級の成果効果を得ることができるように務めなければならない。

・参加者募集のためのチラシ・ポスターの作成、会場看板等を作成する際には、子ども夢基金助成金による活動である旨を表示する。など

Ⅳ. 講演会開催一覧

月日	タイトル　講師　会場
第1回 5月21日	「児童書創作の工夫」
	佐藤　愛子
	八戸市公民館講義室
第2回 6月21日	「読み聞かせの工夫」
	平間　恵美
	八戸市立図書館会議室
第3回 7月27日	「あまんきみこおはなしの世界」
	あまん　きみこ
	八戸市公会堂ホール
第4回 8月6日	「読み聞かせの工夫」
	平間　恵美
	むつ市下北文化会館
第5回 9月11日	「南部昔がたり」
	高橋　幸子
	弘前文化センター
第6回 10月8日	「小さな人たちへの応援歌」
	とよた　かずひこ
	青森県立図書館研修室

月日	タイトル　講師　会場
第7回 11月8日	「読み聞かせのコツ」
	佐々木　正
	八戸市公民館講義室
第8回 12月6日	「小さな人たちへの応援歌」
	とよた　かずひこ
	八戸市公民館研修室
第9回 1月18日	「読み聞かせの基本」
	秋田　敏博
	十和田市民文化センター
第10回 2月16日	「創作おはなしの会」
	八戸短期大学幼児保育学科学生美保野おはなしの会メンバー
	八戸市公民館会議室

Ⅴ．講演会実施状況

(1) 第１回「児童書創作の工夫」

講師　佐藤　愛子氏

はじめに、外崎充子会長が、会の趣旨と今後の活動予定について説明した。

その後、児童書作家でもある本会会員佐藤愛子氏から、最新の自著「大切ないのち生まれたよ～日本の自然に生きる～」（学研教育出版）を例に、本作りの苦労や作品に託す思い、心を砕く点など、創り手の側として、以下のような話がなされた。

「大切ないのち生まれたよ～日本の自然に生きる～」では「キタキツネ」「ニホンザル」「ヤンバルクイナ」のお話を担当した。写真を小さく出来ないので、１ページ当たり 400 字という字数は最初苦労するが、進んでいくと、むしろ 400 字でも余裕がある。言葉を精査し、特に子どもにわかりやすい表現にすることが必要で、例えば「個性的でしょ」を「おしゃれでしょ」に変えた。特に、何度も声に出して、語尾の「ね」「わ」を考えた。また、動物学者による監修により、登場する動物の特性や習性なども正確に表す言葉を選んだ。例として、卵の割れる音や、鳴き声などがそうである。

読者が飽きないように、３話のバランスを考え、「キタキツネ」ではテーマを「子わかれ」とし三人称を使い、友だちづくりがテーマの「ニホンザル」では一人称、「ヤンバルクイナ」では子育てをテーマに、親夫婦の会話形式にした。

作家としてのお話は、選び抜かれた言葉によって、動物の子どもたちの生命が、生き生きと躍動感をもって伝わってくるのであるということと、創り手の思いや苦労がよく分かる貴重なものであった。（茂木記）

―第１回　佐藤愛子　講師―

(2) 第２回 「読み聞かせの工夫」

講師　平間　恵美氏

講師の平間恵美氏は、現在　八戸市小中野児童館館長、八戸ポータルミュージアム「こどもはっち」代表を務め、幼児から大人まで幅広い世代の人たちと関わっている。また、当校　幼児保育学科において、絵本の読み聞かせなどの講義を行うなど、多岐にわたり活躍されている。

この講演会では、絵本の読み聞かせのほか、模造紙で作られた大型絵本や紙芝居など、自作のものを取り入れて、おはなしの世界を紹介した。

八戸市立図書館で行われた講演会には、当校の幼児保育学科２年生も数人参加し、おはなしの世界を体験した。学生たちは講義やゼミナール活動において、絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方の基本的な方法は学んできたが、演じることで精一杯になり、聞き手をお

はなしの世界に引き込むというところまでできない状態だった。今回は聞き手側にまわり、平間氏のおはなしの世界を十分に満喫することができ、学んだことも多かったようだ。

おはなしの世界を紹介する方法として、出版されている絵本や紙芝居の大きさでは、大人数には伝えることが困難であるため、絵を拡大したり、大きく写したりすること、聞き手側の状況に応じて、声の大きさやテンポ、語り方などを変えていくこと、音楽などBGM を使った朗読など、気付くことが多かった。学生は、その後のゼミナール活動の一環として行う「おはなし会」に向けて、演じ方などを研究し、試行錯誤しながら計画を立てていた。「へっこきよめさん」の読み聞かせは、方言を用いた言い回しとテンポの良さで、会場全体が笑いに包まれた。本に書かれている言葉を読むだけではなく、そのおはなしが持っている雰囲気を大切にしながら、読み手のおはなしにしていくことが大切であると実感した。小さな子どもから年配の方まで楽しめるおはなしの世界を広げていくための方法を学ぶことができた。（三村記）

(3) 第 3 回「あまんきみこおはなしの世界」

講師　あまん　きみこ氏

小、中学校の教科書に多くの作品が掲載されている作家の話を、直接聞いてみたいと来場した参加者が、大きな感銘を受けた講演会だった。

アンケートには、一人一人、多くの感想を綴っているのが印象的だ。「年輪にたとえて、子育てから発見したことがたくさんあった話など、自分の子育てを見直すきっかけになった」「作家の言葉の奥深さ、人間性の素晴らしさ、作品の原点に触れて感動した」など。

—第３回　あまんきみこ講師講演会チラシ—

中でも特に、氏が「本当のこと」について語ったことへの感想が多かった。

氏は「ファンタジーしか書けない」「虚構の世界しか書けない」と言われて悩んだ時期があって、「本当のこと」とは何であろうかという問いかけを続けるなかで、「事実」と「真実」という二つの「本当」があることに思い至ったという。それを表わすものとして、ウイリアム・ブレイクの詩を引用し説明した。

「旧満州生まれ」という表記にこだわりを持つ氏には、心温まる作品の一方、反戦のメッセージを込めた厳しい作品も多数ある。

旧満州で、終戦を境に教育や環境が激変し、また全く知らないまま過ごしてきた様々なことを大人になって知り、「平和の尊さ」を必

ず伝えていかなければならないという、使命感を持っている。

特に有名な「ちいちゃんのかげおくり」は、子どもにとってはたいへん辛いお話になっているが、子どもの心に鋭い種となって突きささり、成長とともに育ち、また親になったときに花開く作品である。教科書に掲載されて多数の子どもが読むことで、声高に訴えるよりも強い平和教育となっている。

最後に作家自身による「ちいちゃんのかげおくり」の朗読が聞けたことは、この講演会の最大の収穫であり、参加者からは感動の言葉が寄せられた。（佐藤記）

童話作家あまんさん

代表作を自ら朗読

八戸

読み聞かせを行っている八戸短期大学の「美保野おはなしの会」（外崎充子会長）は27日、八戸市公民館で童話作家のあまんきみこさんによる読み聞かせを行った。

「こさんを招いた「おはなしの世界」を開催し、訪れた市民が深みのある声の朗読にじっと聞き入っていた。

同会は地域住民が読み聞かせを学ぶ講習会などを実施している。今回は初めて作家本人の朗読を聞いた。

あまんさんは京都府在住で、小学館文学賞などを受賞。「代表作に、戦時中に空襲で家族と離ばれ、一人命を落とし、ていく幼い女の子を描いた物語「ちいちゃんのかげおくり」などがある。

この日は市民ら約220人が参加。あまんさんが戦時中に学校の先生から教わった詩などを紹介。また、あまんさん自身が「ちいちゃんのかげおくり」の読み聞かせを行うと、来場者は物語の世界に引き込まれ、涙をぬぐいながら聞いていた。

同市白銀町の佐藤紀代子さんは「まさか本人の声で朗読を聞けるとは思っていなかったので、とても良かった」と感激していた。

深みのある声で読み聞かせを行う童話作家のあまんきみこさん（右）

―8月1日付デーリー東北紙記事―

(4) 第4回　「読み聞かせの工夫」

講師　平間　恵美氏

第2回講演会に続き、第4回の講師を務めていただき、むつ市で講演会を開催した。

第4回講演会でも、絵本の読み聞かせや大型の紙芝居、段ボールで立体的に作られた背景の中で物語が進んでいくおはなしなどが紹介された。平間氏は、既存の絵本や紙芝居などを模造紙に模写し、大人数を対象としたおはなし会で発表している。現在は著作権の問題で、このようなことは禁止されているとのことだったが、大きな画面や立体的な背景は、やはり目を引くものがあり、おはなしの世界へ入りやすいものである。名前絵本を使って自己紹介を行ったが、堅苦しい自己紹介とは違い、誰にでも受け入れられるものであると感じた。

むつ市を中心とする下北地域は、「読み聞かせ」に関心が薄く、講演会当日は、地元の祭りとも重なり、参加者が少なかった。読み聞かせは、決して「子ども」対象ではないが、おはなしの世界へ入っていく子どもの姿から、何か得るものがあるのではないだろうか。保育所や幼稚園、児童館などと協力することで、子どもの姿が見ることができ、その保護者や関係者にも読み聞かせについて、伝えることができたと思う。おはなしの世界が、誰にでも受け入れられるものだということを広く知らせる方法を、考えていかなければならないと感じた。（三村記）

(5) 第5回　「南部昔がたり」

講師　高橋　幸子氏

八戸市内を中心に南部弁での昔語りや読み聞かせを行っている高橋氏は、津軽地域では今回初の紹介となった。南部弁はアクセントや語尾に特徴があり、流れが独特であるが、言葉そのものが意味不明な方言ではないので、他地域でも十分理解できると思われた。

高橋氏ははじめ、命をテーマにした絵本の読み聞かせを行った。演劇経験者でもあるため、身ぶりを交えたり会話文の読みが感情を込めたもので、受講者も聴いていて感情移入がしやすいようであった。

―第５回　高橋幸子　講師―

続いて、自身が読み聞かせや昔語りに関わるようになったきっかけやこれまでの活動について話し、南部弁で行なう事についての子供や人々の反応について経験談を披露した。

その後、用意してきた南部織の半纏をはおり、八戸地方に伝わる昔話を南部弁で語った。しんみりした物語やおもしろい昔話などを取り混ぜ、ゆったりと全体の反応を見ながらの滑らかな語りに、受講者は熱心に聴き入っていた。

高橋氏本人は、普段はあまり積極的に人前で話す方ではないが、講習会では受講者が熱心かつ真剣に聴いて楽しんでいた様子であったため、徐々に調子も乗ってきたようで、自ら積極的に受講者と声を交わしながら語りを進めていったのが印象的であった。

終了後、普段子ども達に絵本の読み聞かせをする事が多いという受講者からは、生の声の良さ（声質・発声・表現力・間合い）や語りの奥深い魅力について、対象が異なる大人への語り、しかも方言での昔話という事で、新鮮で楽しかったという声が多くあった。同じ内容の話を、県内様々な方言による語りで聴き比べてその違いや良さを味わってみたい、学校で子ども達に又若者に聴かせてみたいという提案もあった。

昔語りという、読み聞かせとは一味違う、しかも方言が異なる津軽地域で南部弁を用いて行なうという今回の企画は、講師自身も不安要素を抱えていたが、実際には趣向が変わっていて新鮮でよかったとの声が多かった。長年の活動で培った講師の語りの魅力に負うところが大きいものの、語りが幅広い年齢層に展開可能であるという印象を受けた。通常の読み聞かせ講習会では、訛りや方言の使用によるアクセント等を気にする実践者からの質問が出るが、今回はむしろ方言の良さを前面に出した語りを体験した事で、その地域ならではの言葉や口調を積極的に用いる魅力を感じ取ったようであった。（三浦記）

(6) 第６回　「小さな人たちへの応援歌」

講師　とよた　かずひこ氏

「でんしゃにのって」「どんどこももんちゃん」「バルボンさん」シリーズなど、幼児から保護者まで人気が高い絵本作家の講演には、読み聞かせグループに所属して活動している人や、保育者の参加が多かった。また、子どもが「ももんちゃん」が大好きで、ぜひ作者の話を聞きたいと参加した小学校教諭の御夫婦のように、氏の絵本を持参した参加者も多かった。

講演内容は、絵本作家になられた経緯から創作のエピソード、子どもの読者との交流の話、自作の読み聞かせなどで、明るい語り口に、笑いが度々起こる和やかな雰囲気だった。

ダミーという、絵本になる前の大型の下絵を使っての自作の絵本の読み聞かせは、非常に自然体で、ともすれば、「読み聞かせ」に

ついて「こういうスタイルが正しい」とマニュアル化している傾向に対して、「楽しむことが大事だよ」、「力を抜いて」というメッセージになったのではないかと考える。

―第６回　とよたかずひこ　講師―

アンケートには「氏が言っていたように、楽しく読み聞かせをしたいと思った」という感想や、「楽しかった」という記述が多く見られた。また、「絵本を選ぶ時に子どもの年齢を意識して選んでいたが、必要がないと考えるという氏の話に、目からうろこの感じがした」というものがあった。

「読み聞かせ」は、楽しんで読むことで、聞く方も楽しめて、その反応で読むほうがもっと楽しくなると実感した講演会だった。

（佐藤記）

(7) 第７回　「読み聞かせのコツ」

講師　佐々木　正氏

講師の佐々木正（あきら）氏は16歳の高校時代に演劇を始めたことがきっかけとなり放送部に所属し、その後76歳の今日まで60年にわたり幅広く音声表現の分野に関わってきた方である。

八戸小学校を皮切りに、轟木小学校、多賀台小学校など、八戸市内10校の小学校で40年間の教員生活の間に、児童、生徒に、音読や児童劇の指導をしてこられた。

2004年にご自身が代表になって「八戸市読み聞かせボランティア･青い鳥」を設立し、市内の幼稚園・小学校・公民館などでの読み聞かせや指導を行うなど幅広く活動している。

今回は安房直子の作品を朗読して下さった。現職の時は、小学校校長として、月曜日の朝会では、いつも「読み聞かせ」をしていらしたとのことであった。「読んであげる」のではなく、「こんな楽しいお話があるんだよ、聞いてくれるかな？」と紹介して読んだのだそうである。

佐々木先生の読みは、とても落ち着いた声のトーンで、男性の音読の良さをしみじみと感じさせるものであった。遠くまで通る声での、淡々とした音読は、作品のもっている魅力を聞き手自身が気付き、感じることができるように配慮された素晴らしいものであった。

また佐々木先生が、「読み聞かせ」ではなく「読み語り」とおっしゃっていたことも深く心に残った。　（茂木記）

(8) 第８回「小さな人たちへの応援歌」

講師　とよた　かずひこ氏

10月の青森に続き、八戸市での氏の講演には、八戸市を中心に十和田市、南部町、洋野町から、積極的に読み聞かせ活動をしている参加者が集まった。

内容は青森会場と大体同じだったが、創作のきっかけが日常の小さな出来事や気づきにあること、また子どものころに祖母から聞い

―第８回　とよたかずひこ　講師―

たお話や、父親との会話などの短い言葉の記憶が、登場人物の名前やタイトルに生かされている話など、詳しく紹介された。

アンケートには、「お話を作るときの視点が面白く、興味が持てた」「ちょっとした体験から、作品が生まれているということが分かり、とても興味深かった」など、作者ならではの話が好評だった。そして、日ごろ子どもへの読み聞かせ活動や、教育、育児に携わっている参加者にとって、子どもとの日々の触れ合いが子どもにあたえる影響の大きさを、改めて感じさせる講演だった。

青森会場同様に、参加者は氏の気取らない話しぶりや、読み聞かせを楽しむことができた。アンケートにも、「いつも肩に力が入っていたが、先生の話を聞いて力が抜けました。楽しく続けていきたい」というものもあった。

演題「小さな人たちへの応援歌」は、氏の希望によるものだが、創作の姿勢が良く表れていると感じた。2 回とも大人のみが対象の講演だったが、講師は親子参加の講演を行うことも多く、一回は子どもを交えての、講演形態も実施出来ればよかったのではないかと感じた。（佐藤記）

(9) 第 9 回 「読み聞かせの基本」

講師　秋田　敏博氏

受講者は、秋田氏の講演やワークショップを以前受講した事がある、十和田市内の小学校での読み聞かせグループのメンバーを中心に 15 人程が集まった。

研修では、まず秋田氏が自身の子どもさんが好きだったという絵本の読み聞かせを行ない、それを通して育んだ子どもとの触れ合いについてのエピソード～子供は気に入れば同じ話でも繰り返し聞きたがる事や、物語をもとに独自の遊びを考え出して親子で一緒に遊んだ事を披露した。

次に、絵本の読み聞かせの実践を受講者とともに行なった。使用する絵本は、秋田氏自身が会場に書店のように展示した 70 冊程の中から参加者が自由に選んでよいという指示で、それぞれが絵本を選び手にとって、絵本の持ち方・ページのめくり方・目線・声に出す時の注意点等について、講師のアドバイスを受けながら受講者一人一人が実践した。

DRAGON
まぐりせんにん
ハモのクリスマス
象の背中
ぞうさんのおくびょうかぜ
ぞうさんのおくびょうかぜ
ぞうさんのおくびょうかぜ

に、テーマ・年齢・会場・人数等の条件で異なる状況における読み聞かせに関して、受講者からの質疑応答を行って終了した。

講師は、県生涯学習課の職員としての立場で、県内各地で読み聞かせ研修会を企画・主催すると同時に、父親の読み聞かせグループの一員として自らも精力的に活動をしている。それらの経験を踏まえ、読み聞かせ講習会の企画・広報・集客に関して多大な協力や助言を得る事ができた。（三浦記）

読み聞かせ活動は、どうしても主婦を中心とした女性層に偏りがちになるのだが、今回のように男性が自ら活動している状況の紹介、更に講師として指導を行う事は、父親の情操教育参加・家族内コミュニケーション向上の意味でも、大変有意義である。特に、講師自身の子育て・読み聞かせ体験の中で気づいた点に基づいた指導は、参加した母親にとって父親の役割の重要性を再認識する良い機会となったのではないだろうか。（三浦記）

（10）第10回「創作おはなしの会」

発表者　八戸短期大学学生７名

短大生　絵本発表会プログラム

1	導入（パネルシアター）	三村　弥生
2	絵本の制作について	外崎　充子
3	学生絵本３作品	
	「なにになる」	松舘美由紀
	「だーれだ！」	石橋　　咲
	「ポンチョのおいのり」	吉村　　円
4	手遊び	三村　弥生
5	学生絵本４作品	
	「ボクがいちばんえらいんだ」	袴田　千里
	「トラ」	稲垣　彩乃
	「『絆』　～Family～」	太田　　愛
	「ぷうちゃんとまほうのかがみ」	眞田里佳子
6	会場トーク	

本事業の最終回にあたり、短大生７名（児童文学Ⅱ選択者）による創作絵本の発表を行った。授業では、お話の作り方、本の構造、画材、製本等を学び、３回目で絵本を提出した。発表者たちは４回目の発表会・合評会後に推薦された学生たちである。

講演会では作品発表の前や間にパネルシアター、手遊びなどを入れ、最後に会場トークを行った。

最後の会場トークは三浦委員の司会で行われ、制作者の一言、参加者の感想、美保野おはなしの会会員の講評などが語られた。会場の方々と絵本を通して和やかな交流をはかることができた。学生には、外部の読み聞かせリーダーの方々から感想やお誉めの言葉をいただき、大きな励みになった。

〇参加者の感想

～アンケート用紙の記載から～

・学生の皆さんの個性がそれぞれ感じられ、作品を拝見でき、とても楽しかったです。創作を自分でしてみると、絵本を選ぶときに勉強になりますね。新しい視点をいただきました。ありがとうございます。
・とてもいい勉強をしていると思いました。絵はとても上手、おはなしもおもしろい。
・はじめての参加ですが、売られている本と違い、手作りがとてもよかったです。私も作りたくなりました。
・今回２回目だったのですが、２回とも楽しかったです。ほのぼのした気持ちになりました。
・とても楽しかったです。個性あふれる作品に会えて、参加できてよかったです。
・出版して売ったらどうですか。買いたいと思います。

・この会を今年で終わらせず継続してください。他　　（外崎記）

―第10回　学生による読み聞かせ―

Ⅵ．考察（課題と成果）

10回の講演会を5人のスタッフでめまぐるしく展開させた1年間だった。振り返って課題と成果を整理してみる。

〔課　題〕

(1) 総　務

事務関係について、申請関係手続きが非常に煩雑で、手引きの通りに記入しても修正を求められたりと、手引き本の存在の意味が感じられなかった。事務手続きに要する時間と手間を考えた場合、独自に事業を進める方が有意義であると感じた。

(2) 会　計

基金からの入金は、申請が認められた段階で一部が振り込まれ、残金は活動状況報告後の申請で支払われる。そのために、講師の謝金（上限10万円）をはじめ交通費、宿泊費、会場費など会員による立替え払いが続いた。

必要経費として、自家用車で移動した場合はガソリン代が低いなど負担が大きかった。また、本の販売は認められていないが、参加者から希望する声が多かった。

(3) 広報と集客・開催日時

開催に先立ち、八戸市と周辺市町村の公民館・図書館・小中学校・幼稚園・保育所・福祉施設等に案内ポスターやチラシを郵送し、掲示や配布を依頼した。県内主要メディアに後援と宣伝、取材を依頼した。

市内小学校長協会、中学校長協会で活動内容と日程などを紹介、ポスター・チラシの配布と提示を依頼した。

コミュニティＦＭ番組「私の街八戸」で会の活動内容と日程を随時紹介し、終了後も一回毎に内容を取り上げた。

講演会ごとに次回以降のチラシを配って参加を呼びかけたが、1回の参加状況は40名の域を出なかった（第3回は220名）。むつ市では苦戦したため、次の弘前市では知り合いに個別に電話で参加を依頼した。

広報に関しては、幅広い機関との連携・協力が必要であることをあらためて実感した。特に今回は、指導者養成という観点から一般参加者の受講を想定したが、県内一円に対象を広げたことや、主婦層への告知・集客に関して広報を徹底できなかった。スタッフ不足

と毎月開催による時間的余裕のなさが原因ではないかと思う。

類似した内容の講習会が多く開催されるようになった昨今の状況を見ると、講習会も指導だけでなく、プログラムにもっと工夫が必要であったと思う。特に、指導者養成という括りも効果的ではなかったかもしれない。

また、「八戸短期大学」の名称を表記できない制約もあり、初めて活動する「美保野おはなしの会」では知名度が無く、集客が難しかった。

読み聞かせに集まる方々は常連の方と無関心な方とに二極化しているといえる。中間層やその他の層には個別に働きかけ何人かで連れ立って来場するよう、誘いかける必要がある。男性客も少なかった。集客にはかなりの工夫が必要だ。

しかし、参加した方々の感想はどの会場も上々で、数の少なさを補って余りあるものだった。特に、第2回のあまんきみこ先生の回では220人が参加し、反響も大きかった。あまん先生の知名度と作品へのなじみ深さが集客につながったものと思う。

それにしても我々会員5人が痛切に感じたことは「本学の学生が参加できる日時・会場の設定が望ましかった」ということである。10回とも短大生が授業中の開催であり、最も参加して欲しかった幼児保育学科の学生に良きチャンスを与えられずに終わったことは残念でならない。平日の1時半開催という時間帯は厳しい制限であった。

これらの要因として、多忙な教員がスタッフであったため、先に自分たちの都合で日程を組み、参加者主体で検討しなかった影響が参加者数にあらわれたと思う。

(4) 会場・進行

会場はどこも講演会にふさわしく、快適な環境であった。駐車場も確保されて、会場設定は適切であった。

進行は毎回①会長挨拶②講師紹介③講演④会場トーク⑤お礼の言葉で進んだ。会場設定や受付、アンケートの回収などは回を追うごとにスムーズに行われるようになった。

挨拶では毎回子ども夢基金の助成事業であることを話し、単年度で終了することも付け加えた。会場からは継続して欲しいという声が毎回聞かれた。基金の政府方針は23年度未定であり、我々スタッフも今年度の制約の中では継続は無理だと実感していた。

〔成　果〕

(1) 普段地方で接する機会のない絵本作家とじかに話ができたのは、参加者のみならず我々スタッフもよい経験・勉強になった。

・創作の裏話やエピソード
・絵や言葉によせる思い
・絵本作家になった経緯
・境遇や環境、生い立ちと作風
・子どもの読者との交流
・ダミーを使っての読み聞かせ　など

(2) 読み聞かせを実践している方の心配りや技術、経験談はスタッフがすぐにでも取り入れたいものばかりであった。

・本の言葉を読むだけでなく、雰囲気を大切にしながら読み手のお話にしていく。
・聞き手をおはなしの世界に引き込む工夫として絵の拡大・大きな画面・立体的な背景・BGMの使用などがある。
・本のめくり方　めくりぐせの付け方
・立ち位置（光との関係）と背景（黒で覆

う）の工夫
・方言の良さ
・自然体で力を抜いて楽しく読む
・選書は年齢にこだわらない
・「読んであげる」のではなく、「聞いてくれるかな」という姿勢　　など

(3) 全体で延べ400名の方が参加した。年配の女性が多かった。アンケートの記述を読むと多くの方に満足していただけたと思う。どの方からも暖かい声援をおくっていただいた。

(4) 講師の方々や参加の皆さんとスタッフの交流をはかることができた。講師自ら集客をしてくださった方もいて、感謝にたえない。この活動を通して絵本作家や県内の読書関係者との人脈を築くことができた。

(5) 委員のスタッフ5人は所属学科や専門がそれぞれ異なるが、各自の分野を生かし、協力して活動に当った。助成金事業により、団体活動のあり方、開催運営のノウハウ等を学んだ。

Ⅶ. 終　わ　り　に

今後に課題を残した事業ではあったが、全体的に、地方での読み聞かせ講演会の内容としては目標を達成できたと思う。今後に向けて、より内容や対象、開催日時に関して吟味し、発展可能な研修プログラム実施を検討する必要がある。

県内一円に蒔いた種が時間をかけて成長していくことを願っている。

参　考　文　献

1) 独立行政法人国立青少年教育振興機構刊「平成22年度子どもゆめ基金－助成金募集案内－（子どもの読書活動助成用）」
2)「 子ども基金助成交付の条件」